

翻訳教育の現場

柴田 耕太郎
Shibata Kotaro

0. はじめに：私の立場

『『これはその中に彼が住んでいるところの家です』に類するような悪文が、翻訳だけでなく評論文などにも見られることの最大の責任は英語教師にあるのではなかろうか』

とは名門・駿台予備学校の実力講師だった伊藤和夫の言である（『予備校の英語』研究社）。

私は40年間、翻訳を業としている。演劇、映像、産業、出版と守備領域を増やしてきた。業容も、個人事務所のものであったものが時代の風に乗れ、そこそこの中堅企業に発展した。最初は自分で訳し、次に人のものを直し、最近は教えることが多い。

この事業で一番怖いのが、クライアントからのクレーム。不払い、どこか訴訟になりそうなこともあった。翻訳者に文句を言うと「間違っているのは客のほうだ」と言われる。仕方なしに、自分で原文と訳文を比べ、辞書・文法書を総動員して、どちらの言い分が正しいか、点検してゆく。つらい作業だが、これで私は、学校英語でも学術英語でもない、現場の「真剣英語」に開眼した。商品としての訳文を、早く・安く・良く、提供する技術のことである。

それにしても当時、訳者から上がってくる翻訳は（いまも時々そうだが）、前述の伊藤和夫の言を体現するようなものが多かった。いちいち細かい校正をしていたのでは、時間も採算も合わない。「翻訳者は自ら養成するしかない」そう思って、翻訳教育を思い立った次第だ。

1. 語学教員は何をやっているのか

①ワイルド「幸福の王子」の例

High above the city, on a tall column, stood the statue of the Happy Prince. He was gilded all over with thin leaves of fine gold, for eyes he had two bright sapphires, and a large red ruby glowed on his sword-hilt.

（「幸福の王子」冒頭部分）

これを最近、翻訳の期末試験に出した。

High above the cityを、ほとんどの学生が「高い町の上に」「町の高台に」「町の高いところに」と訳した。「町の上高く」と訳せたのは獨協で23人中2名。別の所謂ブランド大学で同じ問題を出したら、こちらは32人中正解は1名だった。

「このhighは形容詞でなく副詞。副詞+前置詞句は『副詞で大状況（または大まかな位置）、前置詞句で小状況（または具体的な場所）を示す』と通則（法則まではいかない）を教えてやっていたら、こ

んな結果にはならなかったはずだ。何でお前が教えないのか、と言わないで頂きたい。私は専門科目「翻訳」を教えているのだ。文法の基礎は、語学教員が基礎課程で叩きこんでいて当然ではないか。

②カリキュラムと教員の意識

戦後の新制大学では「大学教員は研究者」というのが当たり前になり（旧制の大学予科または高等学校の教授は教育者であって研究者ではなかった）、論文を書くことで実績を誇示する風潮が強くなった。もちろん研究すること自体は悪くない、どころか褒められてしかるべきではある。だが、それと反対にいくら教育で実績を上げてでも評価されない傾向となってしまった。ここが問題だ。私の古い記憶をたどってみても、大学の英語ってどんなだろうと胸を膨らませて出てみたら、高校や予備校以下のレベルの低いつまらぬ授業に、すっかり幻滅したのを覚えている。太宰治の『正義と微笑』では一高に落ち私立のR大学（予科）に入った主人公が、漢文の授業に感動する場面がある。「朋あり遠方より来る 亦楽しからずや」を旧制中学（今の高校相当）では「仲のいい友達が久しぶりに酒をもって訪ねて来てくれたのがうれしい」などと習っていたのを、「同じ志の人間がいることを知るのには実に心癒えることだ」という意味だと実証的に講義を受け、さすが大学と思うのである。

英語でもこれが必要だろう。新制大学の前期2年を旧制の高等学校または大学予科（ともに3年）に例えれば、この期間、まだ受験勉強の余熱で英語の力が落ちていない時期に、さらに徹底した読解訓練をすべきだと私は考える。読むことは語学学習の礎であり、この基礎が確保されていれば、話すことも、聞くことも、書くことも、実に短期間で習得できる。後期2年で専門分野の英文を読みこなすことなど何でもなくなるはずなのである。

③せめてこれだけは教えてほしい：文法の通則

「文法の通則」とは厳密に100%ではないが、大体そう読める場合が多いもの。いくつか例を挙げれば—

1. ①で挙げた**副詞＋前置詞句**もそうだが、**it**と**that**と**this**の違い：「itは今文中で問題になっていること、thatは直前のこと、thisは直前・直後のこと」とざっくり教える（例外は専門課程でやれば済む）。**and**で結ばれた**同義語反復**：dangerous and destructiveを「危険で破壊的」と訳し分けるには及ばない（後の単語はリズムのため加えたただけ）。**句読法**：コロンは以下詳細のしるし、セミコロンは比較・対照・敷衍・節と節を結ぶ大きなANDの意味、など。**修飾語の掛かり方**：N1+N2+Mの場合、MはまずN1とN2の両方に掛けてみる、それでおかしかったらN2にのみ掛けてやる（Mは修飾語句）。**andの意味**：20通り以上の日本語に置き換えられる。**カンマの意味**：私の恣意的な分類では8通り。**日英語の誤差**：powerは「力」ではあまい、「権力」「権限」「職権」「権能」「政権」と狭めてゆく。

これらは文法書や英語解説本にはあまり書かれていないが、翻訳に至る前段階での英文読解に是非必要なもの。こうしたことを教えて初めて、学生も「さすが大学の英語」と思うのではないか。

理想を言ってもしょうがない。「翻訳」以前の読解常識が未整備ならば、基礎工事は自ら施すしかあるまい。そこで翻訳の授業に入る前、1時間かけて「アンドとカンマ」、そして後の2、で述べる「翻訳の作法」を講じている。次はその内容の一部だ。

(1) andの規則

- i) 同一の品詞, 同一の形, 同一の機能, 同一の時制, のものを結ぶのが原則
例: She is sincere and honest. (形容詞, 補語, 性質の並列)
- ii) 1, 2, 3, — and N の形が原則 (Nは任意の数)
例: He is kind, wise (,) and diligent boy.
*andは次で列挙が完了するしるし。発話者の念頭には, 三つの形容詞以外は存在しない。
「そして」との訳は次の diligent が強調されるのでふさわしくない。
- iii) and が省かれているのは, 列挙の未完了 (場合により, リズム重視)
例: We are a nation of flower-lovers, but also a nation of stamp-collectors, pigeon-fanciers, amateur carpenters, coupon-snippers, darts-players, crossword-puzzle fans.
- iv) 1 and 2 and 3 — and N の形をとるのは, 各部分の強調
例: But what about potatoes and cabbages and carrots and onions?

(2) andの働き

- i) 対等 (andの前後のいわば「格」が同じ) 代表的な訳語「と」「また」
例: He is a writer and singer.
- ii) ゆるい順接 (対等に近い。ほぼ同時性を示すか, 前からすんなり意識が流れる) 代表的な訳語「また」「そして」
例: All of us sleep and dream.
- iii) きつい順接 (時間の流れが感じられるか, 少し因果が感じられる) 代表的な訳語「そして」「それから」
例: We had a week in Paris and went to Tokyo.
- iv) 前節の帰結 (andをはさんで, 因果がはっきりしている) 代表的な訳語「それで」「だから」
例: He was tired and went to bed early.
- v) 逆接 (butに近い) 代表的な訳語「なのに」「だが」
例: So rich, and he lives like a beggar.
- vi) 付加 (後半部分を強調する) 代表的な訳語「それも」「もっといえば」
例: He likes to read, and to read out loud.

(3) カンマ

- i) 挿入 (句, または節の形で, 文の主要要素の間に入る。カッコで括って考えるとよい)
例: He was, as a matter of fact, pretending to be ill.
- ii) 言い換え (前言と同じ格で, 言換えたり, 敷衍したり, 詳細に述べたりする)
例: Here is Mrs. Martin, the new English teacher.
- iii) 文の区切り (句, 節, 文などを区切る。viと区別しにくいことがある)
例: If you are ever in Tokyo, come and see me up.
- iv) 関係代名詞の非制限用法 (先行詞の属性を述べる)

例：I sent it to Jane, who passed it on to John.

- v) 並列・列挙（並列のandと共に用いるカンマ）

例：There were various kinds of musical instruments such as violins, clarinets, and trumpets.

- vi) 読点の代わり（掛かり方をわかりやすくする。除いてもよい場合がある）

例：And whoever does not exert himself until he has a large power of carrying out his good intentions, may be sure that he will not make the most of the opportunity when it comes.

- vii) 附加的に続ける（前の節で意味は完結しているが、さらに補足する）

例：In the midst of it you can see nothing but this wall, winding on into the distance.

- viii) andの代わり（リズムを出す。文体を締める）

例：It is not commonly brilliant, too often it is lamentably deficient.

2. 専門科目としての翻訳

主宰する英文教室で「英語プロ再教育」を掲げ翻訳を教えている。単独訳の訳書を出した人が40人以上、10万部のベストセラーを出した人が3人、訳書30冊に達した人が3人いる。多少なりとも誇ってよい実績だろう。

だが英語プロ（翻訳・通訳者、大学・予備校英語教員、語学・翻訳書編集者、外資系幹部、国際ジャーナリストなど）と、プロを目指す社会人そして翻訳に興味ある学生とではレベルが違う。大学の授業では当然程度を下げねばならないが、教える根本は同じである。

的を知らねば矢は射れまい、すべてに通ずる「翻訳の作法」とも言うべきものがある。

①翻訳に必要なもの：文法力、論理力、教養力（調査力）、文章力

- i) 何と言っても文法力。翻訳と言えども英語、英語を学ばずして何を学ぶのか。これは先ほども述べたが、低学年において徹底的に教えておいて欲しいものだ。
- ii) 論理力があって初めて筆者の意識の流れが読める。日本語が精確に読めねば、話の展開を追えないのと同じこと。
だがこれだけでは足りない。従来の「英文和訳」はi), 「英文解釈」はi) ii) にとどまっていた。だから、冒頭のような伊藤和夫の言が出てくるわけである。
- iii) 厳密に言えば、原著者と同じ教養が無ければ翻訳出来ない。そこまでは無理にしても、ふだんからいろいろなことに興味を抱き、判らないことは調べるのが、翻訳には必要だ。
- iv) その上で、自分が理解したことを達意の日本語で記すことになる。これこそが翻訳の醍醐味といえよう。

もう少し具体的に書けば、次のようになる。

- 1 文構造をきちんと把握する
- 2 掛かり方を正確につかむ
- 3 多義である英単語の意味を確定する

- 4 andとカンマと句読法にこだわる
- 5 文の論理を理解する
- 6 記述内容のウラをとる
- 7 英文を等価の日本語に置き換える

②翻訳のセオリ：面倒な理屈があるわけではない

先に記したごとく、どんなに力があっても的がどこにあるか分からねば矢は当たらない。翻訳業界で一応、常識となっているものを挙げる。

〈公理〉

翻訳は商品である

〈定理〉

正確で読みやすいのがよい翻訳である

〈訳文の指針〉

- 一文を短くする
- 掛かり方をハッキリさせる
- 読点は多用しない
- 音読に耐える文章にする
- 不用意に接続詞・接続助詞を用いない
- 語義は正確に使う
- 同じ言葉は続けない

③授業の進め方：文法⇒語義⇒直訳⇒等価の日本語

2, ①, ②を予め説明したうえで、翻訳の授業に入る。授業はおおむね次のように進めている。

- 1 掛かり方を示す構文分析
- 2 一語一句おろそかにしない解説
- 3 英文和訳での正解となる「原文に即した訳」
- 4 原文と等価の日本語を目指す「モデル訳」
- 5 一般的受講生の答案添削

これにより、受講生は「一点の曇りなく英文を読み解く」ことができる。そして、自信を持って自分の文体で訳文を作成することが（人によっては、だが）出来るようになる。

具体例を、1, ①の「幸福の王子」でやってみる。

(ア) High above the city (イ), (ウ) on a tall column (エ), (オ) stood the statue of (カ) the Happy Prince. He (キ) was gilded all over (ク) with (ケ) thin leaves of (コ) fine gold, (サ) for eyes (シ) he had two bright sapphires (ス), and a large red ruby (セ) glowed on his sword-hilt.

構文分析

第一文：M > M > V + S.

第二文：(節その1) S + V + C + M, (節その2) M + S + V + O, and (節その3) S + V + M.

解説

(ア) High above the city

「町の上高く」. 最初に大まかな位置 high (高く) といって、次に具体的な場所 above the city (町の上方) を示す.

(イ), (カンマ)

前後の同格 (共に主文の stood the statue に掛かる、場面はズーム・インしている) を示すカンマ.

(ウ) on a tall column

「背の高い柱の上に」. on は、接触を示す. tall は、背の高さ (のっぽ) が強調される.

(エ), (カンマ)

次からはじまる主文に掛かる修飾語 (この場合二つの副詞句) が終るしるし.

(オ) stood the statue

本来だと the statue stood になるところだが、the statue を強調するため SV が逆転している. stood (立っていた) → 何が? → the statue (像)

(カ) the Happy Prince

H と P が大文字なのは、固有名詞化のしるし (「幸福の王子」といえば、町ではその像のことに決まっている)

(キ) was gilded all over

「至るところ金箔をかぶせられていた」. この all は形容詞「全ての」でなくて、強調の副詞「全く、ほんとうに、すっかり」. over は副詞で、「一面、至るところ」.

(ク) with

手段、媒介、材料を示す with.

(ケ) thin leaves

「薄い葉」. leaves の単数 leaf は、(1) 可算名詞で「葉」、(2) 不可算名詞で「箔」. 不可算名詞は複数形をとらない. よってここは (1).

(コ) fine gold

「純金」. fine は「精製された」. 多義の形容詞に注意.

(サ) for eyes

「目としては」. ここの for は、交換・代価を示す for.

(シ) he had two bright sapphires

「二つの輝くサファイアを持っていた」が直訳. この have は、「性質・属性として人がある物・特徴を持っている」ということ. → 「(目は) 二つの輝くサファイアでできていた」.

(ス) 節 I, 節 II, and 節 III.

He was gilded all over with ... , for eyes he had ... sapphires, and ... ruby glowed on

S V C M M S V O S V M

三つの節が並列している。 , and は次で並列が終るしるし。

⇒1, 2, 3 なら並列は未完了（並列すべきものを全部言いきってはいない）。

1 and 2 and 3 なら各部分の強調。

(セ) glowed on his sword-hilt

「(大きなルビーが) 刀の柄の上で輝いていた」。 A large red ruby が主語。

[原文に即した訳]

町の空高く、一本の背の高い柱の上に、「幸福の王子」の像が立っていました。彼は純金のうすい葉っぱで全身覆われており、目は二つのきらめくサファイアでできていました。また大きな赤いルビーが刀の柄に輝いていました。

[モデル訳文]

町の空高くそびえる柱の上に、幸福の王子の像が立っていました。王子の身は薄い純金の葉でおおわれ、輝く目はサファイアでできていました。刀の柄には大きなルビーが光っていました。

[受講生の訳を添削]

町の上 (ア) の高いところにある背の高い柱の上に、幸福の王子の (イ) 彫像が立っていました。(ウ) 彼は (エ) 全ての上に、(オ) 素晴らしい薄い (カ) 金箔によって包まれていて、(キ) 目のために (ク) 彼は (ケ) 2つの輝いているサファイアをつけ、そして大きな赤いルビーが刀の柄の上で (コ) 輝いていました。

(修正)

(ア) に高くそびえる

(イ) 像

(ウ) 王子は

(エ) すっかり全身を

(オ) 純金の

(カ) 葉っぱに

(キ) 目には

(ク) 削除

(ケ) 二つの

(コ) 光って

(理由)

(ア) 町の上に高くそびえる = 空高くそびえる

(イ) あとで炉で溶かされるのだから彫像ではない

- (ウ) 翻訳臭をとる
- (エ) all は副詞
- (オ) fine gold で「純金」
- (カ) leaves は可算名詞「葉」の複数形
- (キ) この for は「……の代わりに」
- (ク) 分っている言葉は省く
- (ケ) 漢数字を使う
- (コ) 同じ言葉を続けない

3. ライヴ翻訳講義

翻訳を受講する学生に対し、文法は徹底的に指導できても、訳文を添削するのは結構むずかしい。個人の文体がからんでくるからだ。最低「下訳」として使える程度には手を入れるが、それから先は本人の発奮次第ということになるだろう。

次に示す答えは結構できる学生のもので明らかな誤訳は二か所だけ（といっても一冊に比例させれば何百か所になる）。だが日本語がいただけない。受験で「人工日本語」たる「英文和訳」に慣れているためだろう。英文和訳では英文が読めたことにならない。原文と等価の日本語（原著者が日本人だったらどう書くか）になって初めて翻訳は「商品」となるのである。

ロマンス小説 「サラの冒険」

（原文、文法解説、受講生の訳文、私のコメント、の順。下線は訳文言及箇所、 印は文法解説箇所。文法解説、私のコメントともに略述また一部省略してある。ヒロインのサラは活発な若い娘）

Isn't it time you went off to your meeting, Dad? I can manage here if you just turn the sign on the door to "Closed" as you go out.

Duster in hand, Sarah pulled the stepladder into position in front of bookcase and began to climb up. It was cramped here in the storeroom but at least she could see through into the shop if need be. Now, though, she scanned the shelves carefully, reading the title on the spine of each book in turn and checking them against a list in her head.

それでは、いつものように文法解説からはじめます。

Isn't it time you went off ...

何で今のことなのに went off と過去形になっているのでしょうか？ これは一種の仮定法「本来であつたら出かけていていい時間」ということですね。

manage は努力を含意します。皆さんのバイト先の manager って煙草吹かして給料もらってるわけがないでしょ。いろいろ目配りして、小言もいって、売り上げを気にして、大変ですよ。

here in the storeroom

「物置のここ」なんて訳さないでください。古書店ですから storeroom は「書庫」。「ここ」>「書庫の中」と副詞+前置詞句で場面が狭まっています。

if need be

慣用句で「もし必要なら」です。

in turn

(1) 対象がふたつなら「交互に」(2) 三つ以上なら「順番に」。ここは each book との兼ね合いで (2) です。

では今日の当番の川原さん、あなたの訳文を検討してゆきましょう。

(川原、自分の訳文を読む)

集りに出かける時間じゃない、お父さん？ ドアに掛っている札を返して“閉店”にしてくれたら、私がここを管理できるわ。

布巾を手に持ったサラは本棚の前まで梯子を引いてくると、それに登り始めた。物置の中は狭苦しいが、少なくとも、必要となれば店内を見通すことができた。そして彼女は棚を慎重に見ている。それぞれの本の背の題名が、彼女の頭の中の順番通りに並んでいるかどうか確認していた。

「集りに出かける」とありますが、目的語自体が重要でない場合、日本語では省くのが普通です。それから、ここ小説の出だし部分なので、原文にはなくとも発話の言葉を入れて「**もう出かける時間じゃない、お父さん**」としてはどうですか。文末の？はどうしても付けざるを得ないときに限ってください、日本語の文章なのです。それと他にも見られますが、何故鉤カッコしないのですか。直接話法ですよ。

「私がここを管理できるわ」はいかにも事務的。親と娘の古書店なのです。「**あとはやっておくわ**」ぐらいにしましょう。

登山ではありません「登り始めた」でなく「**上り始めた**」でしょう。

階段を上って本を整理するのだから、文法解説で述べたように「**書庫の中**」としたほうが読者に分かりやすいでしょ。

次「**少なくとも**」に「**必要となれば**」の気持ちは含まれています。訳文は長くなりがちです。なくても意味が変わらぬものは省くのを心がけてください。

「**見通すことができた**」何かイヤだな……。そう、これ「過去における現在」でしょ。書き手もその場面に入り込んでいるのだから、現在形にして「**見通すことができる**」。

「**棚を慎重に……**」の一文、たどたどしいですね。読みやすく和文和訳してください、例えば「**棚にある本の背表紙を丹念に眺め、頭のなかのリストと照らし合わせた**」とか。in turn は訳さなくともよいでしょう。なくても分かるし、わざわざ訳すと、「**順番**」が強い意味を持ってしまうでしょ。

‘Are you sure? You’ve already worked so hard today, keeping an eye on the customers as well as sorting through all the old stock. I don’t like leaving everything to you.’ William Bryant glanced around the shop with faintly troubled grey eyes before darting a frowning look at his watch.

‘I’ll be fine and, anyway, there really isn’t a lot more I can do here now. Philip will be along soon to pick me up.’

ここの文法解説です。

keeping an eye

目の機能を象徴した「代表単数」の使い方ですね。

faintly troubled grey eyes

このtroubledは(1)「(顔つきが) 困ったような」(2)「(人が) 精神を病んでいる」のうち(1)。怪しかったら簡易英英辞書を引くとよいです。ODEにはtroubled: beset by problems or difficulties/ showing distress or anxietyとあります。

次のI’ll be fine

文脈次第でどうにも訳せる表現です。ここは、父親のAre you sure?「お前ひとりで店の片づけができるか」との問いに対する答えでしょ。理屈で言えば「お父さんがいなくても自分一人でこの場はなんとか片づけられるわよ」ということ。fineが多義で皆さん迷うのですが、ここでは相手の質問への返答で「結構な」「存分な」「きちんとした」という意味で使っています。

there really isn’t a lot more I can do here now.

really ~ notは「絶対に……ない」。a lotは名詞句で「多量のもの」。moreは「今までに比べて」。I can do here nowは、a lotに掛かります。

(川原さんが訳文を読む)

本気で言っているのかい？ お客さんに目を配ったり、全ての古い在庫を整理したり、今日はもうたくさん働いたじゃないか。全て君に任せるのは気が引けるよ。ウィリアム・ブライアントは衰えた灰色の目でお店のあちこちをちらりと見たあと、しかめ面で腕時計をにらんだ。

私が今ここでできることはもうないから平気よ。それに、もうすぐフィリップが私を迎えにここへ来てくれるだろうし。

Are you sure?からleaving everything to you.まで、クオテーションで括られた直接話法です。わざわざ中間話法にする必然性はありません。sureの内容はmanage hereだから、日本語なら「大丈夫かい」といったところ。

まあ性格にもよりますが、身内の会話では丁寧な言い方をしないのが普通でしょう。「お客に目を配っ

たり」でどうですか。

all the old stock 「全ての古い在庫を」ではいかにも翻訳臭い。「古い在庫を全部」

the shop ですが、ここ叙述の文なので丁寧さは不要「店内」。

そして、文法解析でさっき言及した箇所。faintly troubled grey eyes の faintly troubled は、娘の好意にすがってよいものか気にしている様子です。「ちょっともめごとがある」→「目が少し悪い」？ととったのでしょうが、誤り。「ちょっと困ったような目をして」。

「……のあちこちをちらりと見たあと」は表現がくどい。皆さんだって最初から日本語で書くなら「……をさっと見てから」とするでしょう。

「私が今ここで……」は硬い。直接話法にしてやわらかく「それに」。理屈っぽく理由を述べる箇所でないでしょ、意識の流れを読んでください。代名詞 me, なくても分かるのなら訳さないのが、翻訳の定石です。will be soon along to pick me up. 娘のウキウキした気持ちを出さなきゃ、読者も楽しめませんよ。また、ここで直接話法のカッコを閉じる。直すとこんな感じかな。「大丈夫、それに私ができることももうそんなにないの。もうすぐフィリップが迎えにくるし」

Sara smiled affectionately down at the top of her father's head, wishing that she could ease some of his anxieties. But he was a reserved man, always keeping things bottled up and holding his worries to himself.

He was in his late fifties and she could see now that his once thick brown hair was beginning to thin at the crown and there were definite streaks of silver around his temples. It was distressing to see how much he'd aged these last few months since he'd battled with the decision to put the shop up for sale.

文法解説を続けます。

It was distressing to see how much he'd aged these last few months since he'd battled with the decision to put the shop up for sale.

さてここ、「父親は店を売ることを決めた」のでしょうか。それとも「まだ決めかねている」のでしょうか。

時制を一つずらせると考えやすい。It is distressing to see how much he has aged the last few months since he has battled with the decision to put the shop up for sale.

「決心と戦い出し」それから今までの3か月間「老けて来ている」のだから、まだ決心はついていないのですね。この since は「……以来」ですが、「……なので」ととれないでしょうか。ダメです。理由をあらわす since は (1) 文頭に置かれるのが通例 (2) 後に置かれる場合は前にカンマがくる (3) 既知の理由を導く since が新情報の置かれるべき文末にくるのは不自然、だからです。

(川原さんの訳文の続き)

サラは父親の心配が和らぐようお願いながら、頭のとっぺんに優しく微笑みかけた。しかし、彼は控えめな人で、いつも物事を溜めこみ、心配ごとを抱え込んでしまう。

彼は50代後半だ。サラはかつて濃かった彼の茶色い髪の毛が、頭頂部で薄くなり始めているの

が分かった。さらに、こめかみのあたりにははっきりと銀色の筋が見られる。この数ヶ月間、彼は
お店を売りに出す決意と戦っていたため、老けこんだ彼を見ることは、サラにとって辛いもの
だった。

「和らぐようお願いながら」とするのは、英文和訳なら満点です。でも翻訳ではもう少し柔らかく言ってほしいですね、例えば「**薄れればいいと思いながら**」とか。

But he 「しかし、彼は」ですか。接続詞が紋切型です。それから前言ったように「彼」「彼女」は翻訳ではなるべく使わないように。ここ、単なる叙述よりサラの内面の声をあらわすよう中間話法的に処理すると変化がつきます。「**だが、父は**」。

「彼は50代後半だ。サラは」では「50代後半」が立ちすぎます。さらっと流して、その様態に読者の視点がゆくようにしてはどうですか「**父親は五十代後半で、……なり始めていた**」。「彼の」さっきも言いましたが無くてわかる指示語は省きましょう。

「さらに」と、強調する必要はありません。叙述の流れはandを訳さずとも分かります。

最後のくんだり。he「彼は」も訳出不要。the shopも前と同じ理由で「店」とする。「見ることは」定義文でないのです、もっとやわらかくして。

since he'd battled with the decision to put the shop up for saleの箇所、川原さんの解釈は大体よいのですが、訳文はすこしいただけません。「決意と戦っていたため」を「**(店を売り出す) かどうかさんざん迷って**」に替える。全体としては「**この数か月、店を売りに出すかどうかさんざん迷って老けこんだ父を見るのは、サラにとって辛いものだった**」。

'You go on,' she said. 'I know how anxious you are to talk things through with the accountant and it's good
of him to see you after work like this.'

文法解析です。

You go onのonは副詞で「どンドン、ずんずん」の意味。

be anxious to do 「……を切望して」とbe anxious for 「……を心配して」は混同しやすいので注意してください。

through

一つの単語に前置詞と副詞の意味があることはとても多い。最初に出たonだってそうでしょ。このthroughは副詞で「すっかり」「ずっと」の意味です。

ここのandは、補足的に理由を付けくわえるためのもの。

it's good of himのofは性格・分別を示す指標。

(川原さんの訳文)

もう行ったほうがいいわよ。会計士と話し合うことがどれだけ不安なことかは分かるけど、こ
んな風に仕事の後に会ってくれるなんて彼は親切だわ。と、彼女は言った。

講評を続けましょう。

「もう言ったほうが……」ここも原文通り直接話法でよいでしょう。

You go onは、迷っている父をけしかけているのがわかるように「さあ行って」。

次の , は . に替えていったん文を切った方が、リズムが出ます。ここのandは文法解説でしたように、補足的に理由を付け加えるためのものです。並列的に訳さないほうが、原文のニュアンスに近い。「彼は親切だわ」と言い切るより、余韻を響かせたほうがよろしいでしょう。

このあたり訳し直すと「さあ出かけて」とサラは言った、「パパは会計士さんと話し合いたいと思っているんでしょ。親切な人よね、こんな風に仕事の後に会ってくれるなんて」

4. 翻訳教育の問題点

①学生のレベル：文法教育の重視が望まれる

7年間×2クラス、獨協の学生と付き合ってきた。英文読解力に関する私の学生評価はおおよそ次のようなものだ。

(a) 惚れ惚れする英語力の持ち主が1割。(b) じっくり教えればできるようになる人が4割。(c) 力を上げるには本人の覚悟が相当必要な人が4割。(d) どうしようもなく出来ない人が1割。

(c) (d) は翻訳の授業を受ける以前に問題がある。1, ②で指摘した点を学部、学科段階で考えていただきたい。(a) は標的さえ示してやれば、放っておいてもできるようになる。本人のモチベーションが上がるよう、翻訳の面白さを教えて刺激したい。(b) が私が底上げしたい人たちだ。この人たちを更にできるようにして行けば、獨協全体の評判も上がるだろう。講義もこの人たちを主に意識して行っている。しかし、半期1コマだけでは、どうしようもない。せつかく本人も興味とやる気が出て、いざこれからが楽しみと思っても束の間、授業が終了。同じ授業をまた取ろうと思ってくれる学生もいるが、抽選で落ちるとあきらめてしまう。中には単位にならないのに受け続ける学生もいて、そういう人たちは確実に力をつけている。

再三いうが一般教育としての英文訳読の上に、翻訳があるのである。翻訳の授業を受けるに足る英文読解基礎力をつけるカリキュラムの作成を強く望みたい。たとえば、伊藤和夫『英文解釈教室・改訂版』（研究社）を1コマ1年修了の必須の授業とする。これで文法力と論理力の基礎がしっかり身に付く。やる気のある学生諸君に出会った年、私が「闇ゼミ」と称して課外で教えており、実証済みだ。

②教えられる教員がない：翻訳実務家で教育の出来る人材が求められる

翻訳教育の必要性を痛感し、大学での翻訳講座を作るべく同業のベテラン2人と相談した1990年、翻訳の授業のある大学はほぼ皆無だった。1996年には、翻訳（学、論、研究）を専門として教鞭を執る大学教員は全国で約40人（『全国大学職員録』、『全国短大・高専職員録』）だが、そのうち一般市場に流通しそうな訳書を有している人は半分にも満たなかった（日外アソシエーツの著者データベースを参照）。そして2012年、同職員録で調べたところ全国大学の翻訳講座は120大学で273になっていた。

だが英語学・英文学ができれば「翻訳」を教えられるものではない、という認識は浸透したようだが、講師とすべき適切な人材が見つからないのが実情だろう。訳書を出していれば、翻訳を教えられるとい

うものでもない。ましてや翻訳と通訳を一緒くたにし、通訳出身の講師が翻訳を教えるなど（さすが獨協ではそんなことはないようだが）、噴飯の極みと言える。

翻訳は実学なのである。本気で教えるには次のような要件が必要だ。

(a) 英文学教員程度の読解力があること (b) 理解をきちんとした日本語に置き換える文章力があること (c) 翻訳業界全体を俯瞰できること。つまり商品としての翻訳全般を知り、そのニーズとシーズを心得ていることが必要だ。こんな人材は翻訳業界と連携した翻訳実務家大学院でもつくって養成するしかあるまい。

③翻訳教育が日本を救う：外国人と渡り合える人材の輩出を願って

英語で喋っていて、あるいは英文を読んでいて、何となくわかったつもりでいても、いざきちんとした日本語にしようとするとき次々に疑問が湧くものである。文法力、教養力もしくは調査力、論理力の助けを借り、原著者が日本人だったらこう書くはずと自信を持って言える訳文に仕上げてゆく。この格闘こそが、大学に相応しい英語教育ではないか。

東南アジアに行って英語がしゃべれないと、本当に大学を出たのかと訝られる、という話をよく聞く。これは悲しいかな、彼らの言語の力が弱く抽象概念を自国の言葉で表せないの謂なのである。

明治初期にいち早く西洋式の教育を受けた夏目漱石は、植民地でもない日本の高等教育が外国語でなされることに疑問を感じていた。「日本のNationalityは誰が見ても大切である。英語の知識位と交換の出来る筈のものではない」と。それが明治40年になると、大学での授業は大方日本語で講ぜられるようになっていた。そんな短期間に、自国語での高等教育が可能になったのは、ただただ日本語の咀嚼力の強さによるものだ。江戸時代、オランダ・バタビア総督からの書簡に書かれていたliberty相当語の最初の訳語は「我がまま」であり、それを読んだ将軍をいたく立腹させたという。明治初年に洋学者、中村正直は「自由」との訳語を創案した。福沢諭吉は試行錯誤の末、speechを「演説」、societyを「社会」と訳し定着させた。抽象概念、技術用語の多くはこうして明治の先人たちが工夫・開発し、漢語の本場、中国に逆輸出されたものも多い。

こうしたものの根底にあるのが、言語の咀嚼力である。江戸時代の大儒者荻生徂徠も「中国文というものは、日本人が本気で読めば、中国人より理解できるものなのである」と言う意味のことを言っている。日本人独特の「訓詁癖」である。その訓詁を以て理解し、それを達意の日本語に置き換える訓練こそ、日本人をして単なる英語ペラペラと違った、外国人にも一目置かれる、真に国際的（英語力に加え、論理力、教養力、表現力を兼ね備えた）な日本人を作る礎になるのでなかろうか。（了）

■
柴田 耕太郎 (Shibata Kotaro)

所属：獨協大学外国語学部交流文化学科非常勤講師

Email：shibata@id-corp.co.jp